

第 11 回 文部科学省IB教育推進コンソーシアム関係者協議会
議事要録

■日 時:2022 年 12 月 13 日(火)10:00～12:00

■開催方法:ウェブ会議形式(Zoom 会議)

■出席者:

岩崎 久美子	放送大学教授
遠藤 みゆき	関西学院大学教職教育研究センター准教授
荻野 勉	東京学芸大学附属国際中等教育学校校長
Datta Shammi	日本国際バカロレア教育学会副会長
関田 晃	さいたま市立大宮国際中等教育学校 校長
末吉 弘治	星美学園静岡サレジオ理事長 学園長
田村 香江	香美市教育委員会教育振興課学校教育班指導主事
坪谷・ニューエル・郁子	東京インターナショナルスクール理事長/日本IBアンバサダー
日色 保	日本マクドナルドホールディングス株式会社代表取締役社長兼 CEO
Daniel Reynolds	The IB Association of Japan (IBAJ)共同代表

■欠席者:

青木 一真	東京都立国際高等学校DPコーディネーター
渡辺 寿之	サニーサイドインターナショナルスクール園長/IBヘッド・カOUNシル委員

■オブザーバー:

星野 あゆみ	国際バカロレア機構アジア太平洋地域 日本担当地域開発マネージャー
出口 夏子	文部科学省大臣官房国際課国際協力企画室長

■傍聴:

国立大学協会
日本私立大学連盟

■事務局:アオバジャパン・インターナショナルスクール(文部科学省IB教育推進コンソーシアム事務局)

<配布資料>

資料0_議事次第

資料1_関係者協議会構成員名簿

資料2_文部科学省 IB 教育推進コンソーシアムについて

資料3_令和4年度コンソーシアム事務局活動状況

資料4_国際バカロレアの普及促進に向けた検討に係る有識者会議における主な検討事項(案)

資料5_令和3年度国際バカロレア(IB)を活用した大学進学に関する調査

資料6_構成員からの IB に係る課題意識の共有

席上配付資料1_AirCampus ファシリテーター名簿

席上配付資料2_IB 教育導入サポーター名簿

席上配布資料3_IB 修了生インタビュー記事

<議事次第>

- (1) 令和4年度関係者協議会構成員の紹介
- (2) 令和4年度コンソーシアム事務局活動状況
- (3) 令和3年度国際バカロレア (IB) を活用した大学進学に関する調査報告
- (4) 構成員からのIBに係る課題意識の共有
- (5) その他

■開式

(1) 令和4年度関係者協議会構成員の紹介

各構成員、事務局より自己紹介

(2) 令和4年度コンソーシアム事務局活動状況

※事務局より、資料2, 3 に基づいて説明

(3) 令和3年度国際バカロレア (IB) を活用した大学進学に関する調査報告

※文部科学省出口室長より、資料4に基づいて説明

◆文部科学省 出口 室長

文部科学省の「国際バカロレアの普及促進に向けた検討に係る有識者会議」にて、今後の IB 推進政策を下記の4本の柱で検討している。

- ・幼小中学校段階 (PYP、MYP) での IB の普及
- ・高等学校段階 (DP) での IB の普及
- ・大学入試での IB の活用促進
- ・IB の教育効果等の把握・検証

※コンソーシアム事務局 武藤より資料5に基づいて説明

◆荻野 構成員

(主な論点)

IB 入試について

(主な意見)

卒業生は6回輩出している。その間、大学側の理解は進んでいると思われる。一方、課題もある。卒業生28名のうちIB入試だけで進路を開拓した生徒は3名のみ。IB入試を全く使わず一般選考を受けた生徒は12名。IBDP修了生にとって、IB入試はまだまだ受けやすい入試になりきっていない。例えば、11月に出願する場合、Predicted Grade(見込みスコア)で提出するが1月に取得する最終スコアがそれを下回ってしまった場合、どうなるか明示している大学が一部に限られるという事もあり生徒はIB入試だけに進路を託しきれず、他の入試を探し対策を立てることになる。一方、IBDPコースを設置して間もない学校は、海外進学対策のノウハウの蓄積が不十分で、海外大学進学希望の生徒は多いもののサポートしきれない。海外進学の希望を活かしきれない。さらに海外大学は、多額の学費・生活費をまかなえるかという点でも経済力がボトルネックとなる。

◆関田 構成員

(主な論点)

- ・IB 入試について
- ・IB 教員養成と教員加配の要望について

(主な意見)

本校は開校4年目。一期生が来年度のIBDPコースに進学してくる段階である。国内大学のIB利用入試が全大学の8.5%のみであるという点、非常にシビアな印象を受けている。IB認定校等の目標200校という政府の追い風がある一方で、国内のIB入試利用大学の拡大の遅さは、教員だけでなく保護者にとっても不安要素である。IBDPは国内大学進学を考える生徒には、有効であるとは言えない。やはりIBDPは海外大学進学のためにこそ有効である。一方で海外大学進学をサポートした経験をもつ教員が少なすぎる。今後の進路指導をどのように展開していけば良いかは本校にとっても大きな課題となっている。IB教員養成について、本校は公立であるので、さいたま市として採用試験を実施するが、現時点でIB特別選考というものは実施していない。さいたま市の高校・中学(さいたま市立4高校+58中学校)の教員で勤務経験があるが、IBはわからない教員の中から、毎年10名以上の教員を迎え入れている。さいたま市全体で、学校数からいうと本校を含め1/62の学校の教員の採用となり、さいたま市であっても決して簡単なものではない。教員養成は、採用後の校内でのOJTに頼るものとなる。国からのIB教員への給与の補助はないため、IB教育加配というものは本来ない。そのため、さいたま市の教員の中でのやりくりになり、学校側から市に要望を伝えて加配をお願いしている。望み通りにはいかず厳しい状況にある。国内の公立MYP、DPの一貫校は、4校(自治体:札幌市・さいたま市・高知市・広島市)であり、どこも教員加配は思うようにいかず苦労があるかと思われる。国には公的なIB教員加配制度の新設を検討いただきたい。重ねて、国公立のみ、または私学もできるのが理想だが、教員の交流人事が進めていくことが望ましい。実際、荻野先生(東京学芸大学附属国際中等教育学校)のところと本校とで、交流人事として派遣し合っているが、荻野先生から派遣いただいた1名の教員は正直、戻したくないくらい質の良い先生が来ている。今後、交流人事の拡充を期待したい。

◆田村 構成員

(主な論点)

- ・IB教員養成と教員加配の要望について
- ・大学が求める資質、社会が求める人材という観点からのIB教育の啓蒙と発信

(主な意見)

関田先生からご指摘の教員加配人事は、香美市としても最も大きな課題となっており、保護者および地域から要望書が上がってきているほどの現状である。小学校・中学校も定員が決まっていますが、この中でのやりくりをするしかないが、現実には厳しい。IB教育を持続可能なものとするには、加配というところまですぐに実現できなかったとしても、文科省から冠をつけていただける事によってより訴える側の言葉の信憑性が増すように思われる。今後、IB教育が日本においてどれほど大きな使命を担っているかについても鑑みて、是非ご検討いただきたい。IB教育に、大学が期待する課題発見能力などは、小学校からはぐくまれるべき力だと認識している。香美市の一貫校では9年間の学びとしてこれまで捉えていたものの、その先についての展望を本日はみせていただいた印象である。IB教育をうけた学生の進学出口、また企業の求める人材といった、すべてを踏襲したような、より広範な視点から今後は香美市からも事例を発信していきたい。

◆末吉 構成員

(主な論点)

星美学園静岡サレジオの入試対策と15年一貫教育のご紹介

(主な意見)

本校のIBDPコースは、ソフィアコースという上智大学への進学を前提とした30名規模のコースがあり、その中でIBをやっている。そもそも他の大学への進学を考えていないのだが、IBDPフルディプロマとスコアをきっちり取得して、幅広い教養を身につけた上で、大学でその可能性をさらに発揮して欲しいという考え方である。文系志向のコースではあるが、理系科目でもHLレベルを取らせている。また英語履修科目の中に「演劇」を採用しているなど、特徴をもたせている。保護者からみると大学進学としては分かりやすいが、その上で、生徒の適正に合わせ様々な選択肢ができるように工夫しつつ、IB教育を繋いでいこうとしている。一貫教育としては、英語を母語とするのか、日本語を母語とするのかで、そもそもスタンスが違っていると考える。第2言語を学ぶ目的は「第2言語習得の『技術』」であると捉えている。母語で高度な思考ができるようになるのだが、それだけで良しと

はせず、後々、第2言語でも高度な思考ができるのかどうか。本校のように幼稚園から高校までの一貫校として15年間のカリキュラムを組むのであれば、第2言語で高度な思考を求める教育を実施することは可能である。

(4) 構成員からのIBに係る課題意識の共有

※ご欠席の青木構成員より動画および資料の共有

◆遠藤 構成員

(主な論点)

- ・資質あるIB教員の希少さ、教員養成だけではなく教員として成長し続ける重要性
- ・教員の交流人事について
- ・自治体側がIB教育に理解が浅い場合の予算確保
- ・一般教員の研修の中でもIBを

(主な意見)

青木先生からのご指摘について、大学で質の高い教員になれるようにと指導する中で、学生は非常に忙しい生活をしており、IB生が教員と専門的な学びを継続する中、多くはドロップアウトしてしまう。学問への真摯な姿勢をもち、IB認定校に求められるレベルに達することのできる学生自体が少ない。ただし過酷な学びをやりきった学生たちについては、それは素晴らしい資質をもっている。重ねて、素晴らしい資質をもっていたとしても教員養成の過程のみを履修しただけで本当に優れたIB教員になれるものでもない。教員としてIB教育と出会ったならば、日々の学び、また教員となった後も生徒から学び続ける姿勢が重要であると思われる。IB教員を凌駕するような生徒との打ち合いによって、視野が広がるという事も多い。長い目をもって、教員としての実務経験が少ない先生たちが、より一層、現場において一流の教員に育っていく事を期待したい。関田先生からご指摘の教員の交流人事に関しては、各地域にIB校が増えてくれば、実習生も送り出しやすくなる。また実習中に限らず、協力関係を築いていく事もできると思われる。例えば本年は、TOKの展示をおこなった学校で、本校の実習生も参加をさせていただき、好評であった。本校の実習生はCAS活動・課題論文を必ず経験させるが、実際にCAS活動をおこなう生徒と一緒に行動する機会をつくることもでき、喜びの声が聞かれた。またIB導入を検討している学校の保護者で、進学面でどのような影響があるか不安に思っている場合に、本校の教員を派遣して、過去の進学サポートの経験から保護者の相談に乗り、理解を促進するという様子もみられた。教員からの嘆きの声として、IB導入をしたいが自治体がIBに興味がないという事実と、年間予算の確保の難しさが聞かれる。財政支援は自治体にしか予算を頼るしかないのだろうか。文科省には、今後、一般の教員の研修の中で、IBの研修を実施することも検討いただきたい。IB教員への周囲からの理解の促進という観点からも、良い文化の醸成が期待できると思われる。

◆シャミ 構成員

(主な論点)

- ・教員の専門教科の指導力について
- ・教員になった後の研修体制について

(主な意見)

青木先生の問題提起は、教科指導力という点かと思う。私自身の経験から、まず教える教科の修士レベルを取る(教育学で修士をとるのではなく、例えば歴史学で取る)。さらに高校で数年間、IB以外の一般の授業で教える修行を積む、という事が重要である。若い教員には、学部卒ですぐにIBDP教員になる場合には、該当の教科の先輩教員がいて、見守ってもらえる中でOJTが受けられる環境なのかどうか。そういった環境がない場合、いきなりIB教員として就職しても生徒を指導することは難しい。指導力が抜群のベテラン教員と一緒にやらせる、そういった体制をとらないと、新任の教員が潰れますよという助言を校長などの管理職者にもしている。現職の教員については、遠藤先生のご指摘に同意見です。教員研修では、カリキュラムデザイン的なものが必要となってくる。新学習指導要領では、探究的なカリキュラムの研修が必要となってきているので、県レベル、市レベルでも実施していくことで、IB教員に限らず、素晴らしい教員が生まれてくるとと思われる。

(5) その他

※ご欠席の渡辺構成員より IB ヘッズカウンスル会議の報告(事務局より代読)

◆文部科学省 出口 室長

(主な論点)

OECD 教育大臣会議に参加して

(主な意見)

IB 機構とはデータの提供なども含め、文科省として引きつづきコンタクトをとっていく。

◆レイノルズ 構成員

IBAJ として特に追加意見はありません。

◆坪谷 構成員

(主な論点)

学校全体、一貫校として IB 教育へ取り組むメリット

(主な意見)

IBDP のみの導入ですと、様々な進学コースの中における選択肢の1つという位置付けになるので学校全体に IB の文化が広がりづらい面があるのではないかと懸念している。学校全体で一貫校として IB を取り組む場合、校長・教員・保護者・地域をまきこんでの活動となっていくかと思う。認定校においては、モデル校として地域に広めてくれるとありがたい。2 科目を英語で履修しなければならない縛りがあり、国内、特に地方では教員を採用することが非常に難しいという声を聞く。またその教員が辞めてしまうと、もはやカリキュラムが成り立たない。「英語で 2 科目」にこだわっているのは、IB サイドではなく、どちらかという日本側であるという話も聞いている。当初の偏見、IB 生は英語がペラペラだという思い込みによる科目設定かと思われる。IB 生は、多角的なグローバルな視点で考える人材と考える。経済格差、地域格差を教育格差にはいけないという前提に基づき、この IB 教育をより普及させていくため、大学側にも理解いただきたい。

◆日色 構成員

後日、コンソーシアム事務局へコメントを寄せていただく。

以上